

有田・小田部 60

— 有田遺跡群 第270次調査報告 —

2021

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。本市では、近年の著しい都市化の中でやむなく失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存を行うことによって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、宅地造成および戸建住宅建設に伴って実施された有田遺跡群第270次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、弥生時代の貯蔵穴や古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡をはじめとする遺構が確認されました。これらは、地域の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、事業主である株式会社ラプロス様をはじめ、関係者の皆様には様々な面でご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、宅地造成および戸建住宅建設に伴って、福岡市早良区小田部五丁目21で福岡市教育委員会が実施した、有田遺跡群第270次調査の報告書である。調査は令和元(2019)年9月17日から10月29日にかけて実施し、整理・報告書作成は令和2年度に行った。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、調査担当の吉田大輔が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は、立石真二・林田憲三・吉田が行った。また遺物の写真撮影は吉田が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は、吉田・立石が行った。
7. 本書で用いた方位は世界測地系座標北である。
8. 調査で検出した遺構については調査次数ごとに、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、貯蔵穴をSU、ピットをSPとし、遺構の種別に関わらず1から始まる通し番号を付した。
9. 本書に記載する記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
10. 本書に関する記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
11. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺跡名	有田遺跡群	調査次数	第270次	遺跡略号	ART-270
調査番号	1944	分布地図図幅名	原082	遺跡登録番号	0309
申請地面積	359.47m ²	調査対象面積	359.47m ²	調査面積	179m ²
調査期間	令和元(2019)年9月17日～10月29日			事前審査番号	2019-2-118
調査地	福岡市早良区小田部五丁目41番〔住居表示：5丁目5-11〕				

目次

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地と環境	1
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	2
III.	調査の記録	2
1.	調査の概要	2
2.	遺構と遺物	5
IV.	結語	21

挿図目次

第1図	有田遺跡群および周辺遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図	有田遺跡群調査地点位置図(1/7,500)	4
第3図	調査地点と周辺の遺構配置図(1/1,000)	5
第4図	調査区位置図(1/200)	6
第5図	遺構配置図(1/100)および調査区基本土層略図(1/10)	7
第6図	SU147・SU165 実測図(1/40)	8
第7図	SU147 出土遺物実測図①(1/3)	9
第8図	SU147 出土遺物実測図②(1/3)	10
第9図	SU165 出土遺物実測図(1/3)	11
第10図	SC1・SC190 実測図(1/40)	12
第11図	SC1 出土遺物実測図(1/3)	13
第12図	SB234 実測図(1/40)	14
第13図	SB235 実測図(1/40)	15
第14図	SB234・SB235 出土遺物(1/3)	16
第15図	SD40・SD50 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	17
第16図	土坑(SK)・小穴(SP) 実測図(1/20・1/40)	18
第17図	土坑(SK)・小穴(SP) 出土遺物実測図(1/3)	19
第18図	小穴(SP) 出土遺物実測図(1/3)	20
第19図	その他の出土遺物(1/3)	21

写真図版目次

- 写真1 I区 調査区全景(北東から)
- 写真2 I区 調査区全景(東から)
- 写真3 I区 調査区全景(南西から)
- 写真4 調査前の状況(南東から)
- 写真5 調査前の状況(南から)

写真図版2

- 写真6 II区 調査区全景(北西から)
- 写真7 II区 調査区全景(南東から)
- 写真8 II区 調査風景(北から)
- 写真9 I区 調査区北壁土層(南東から)
- 写真10 II区 調査区東壁北側土層(南東から)

写真図版3

- 写真11 SU147 土層断層(東から)
- 写真12 SU147 遺物出土状況(北から)
- 写真13 SU147 遺物出土状況 近景(北から)
- 写真14 SU147 堀削当時の工具痕(北から)
- 写真15 SC1 全景(北東から)
- 写真16 SC1 石製穂摘具出土状況(東から)
- 写真17 SC190 完掘状況(北から)
- 写真18 SB234 東半部(II区側 北西から)

写真図版4

- 写真19 SB234 西半部(I区側 東から)
- 写真20 SD40 全景(東から)
- 写真21 SD40 全景(北東から)
- 写真22 SD40 西側屈曲部(北東から)
- 写真23 SD50(東から)
- 写真24 SD50(北から)
- 写真25 SK2 土層断面(東から)
- 写真26 SK2 遺物出土状況(北西から)

写真図版5

遺物写真

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成31(2019)年4月25日付で、福岡市早良区小田部五丁目41番地内(敷地面積:359.47m²)における宅地造成および戸建住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課宛てになされた(事前審査番号:2019-2-118)。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれていること、また周辺ではこれまでに、北側で98・224次、南側で172・214次、東側隣地で第166次、西側で15・114・152・201次調査等が行われていることからも、照会地に遺跡が遺存している可能性が高いと考えられた。さらに照会地ではこの照会以前に確認調査が実施されており、既存建物解体前のわずかな面積での調査にも関わらず、当時の地表面下25cmで遺構面となり、柱穴・小穴等の遺構が確認され、敷地全体に遺構が広がっているものと判断された。

これらを受け、遺跡の保全等について申請者と協議を行った結果、宅地造成の際、地表面から約40cmを動き取るため、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないとして、敷地全体(359.47m²)を対象として記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、令和元年(2019)年8月20日付で事業主体者である株式会社ラプロスを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、令和元年(2019)年9月17日より発掘調査を、翌令和2年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託 株式会社 ラプロス

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査: 令和元年度・整理報告: 令和2年度)

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人 (元・2年度)
		同課調査第2係長	大塚紀宣 (元年度)
			藏富士寛 (2年度)
		調査第1係長	吉武学 (元・2年度)
庶務	同文化財活用課	管理調整係	松原加奈枝 (元・2年度)
事前審査	同埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎 (元・2年度)
		同課事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎 (元・2年度)
		事前審査係文化財主事	山本晃平 (元・2年度)
調査担当	同埋蔵文化財課	文化財主事	吉田大輔

II. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

今回報告する有田遺跡群は、福岡市の西側に位置する早良平野に立地している。早良平野は、東側を平尾丘陵、南側を脊振山系、西側を脊振山系から派生した西山・飯盛山・叶ヶ岳に囲まれ、北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内にはいくつかの洪積台地が点在するが、大部分は室見川と西から十郎川、名柄川、金屑川等の沖積作用により形成されたものである。また、室見川河口には愛宕山・龜原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には生の松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代においてはラグーンをなしていたと考えられる。有田遺跡群は、早良平野の北側に位置し、室見川右岸の独立中位段丘上に立地する。この段丘は、南北約1.7km、東西約0.7kmに広がっており、最高所では標高約15mを測る。室見川や金屑川による浸食を受け、大小の谷が形成され、北にハツ手状に広がる形状を呈している。

2. 歴史的環境

有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、早良平野における拠点的集落の一つである。令和2年現在、270次を超える発掘調査が行われている。

旧石器時代は、ローム層からナイフ形石器やポイント等の遺物が出土しているが、まとまりを欠き、

明確な遺構も確認されていない。第6次、第131次調査地点では当該期の遺物包含層が検出されているが、遺跡群が後世に大規模な削平を受け、当時の状況は明確でない。縄文時代の状況も全容は不明であるが、第5次、第116次調査地点を中心に台地南西部に中期から後期にかけての貯蔵穴群が検出されている。また本遺跡の南西に位置する有田七反田前遺跡から突帯文土器等が出土しており、当地における縄文時代晚期から弥生時代早期の状況が窺える。弥生時代には、台地の各尾根上に遺構・遺物が分布する。台地南半部の中央に位置する第2次、第45次、第54次、第77次調査地点では、台地の高所を梢円形に囲むように掘削された断面V字形の環濠が確認されており、長径約300m、短径約200mの規模が推定される。その後も継続して別地点にも環濠が認められ、集落が展開する。また前期前半～中期を中心とする甕棺墓が数多く検出され、前漢鏡や小型彷製鏡、細形銅劍、銅戈等が副葬されている。中期までは台地各所で遺構が確認されるが、後期には遺構数が減少し、活動規模が縮小化しているようである。古墳時代には、竪穴住居跡等から軟質土器や陶質土器が多く出土し、朝鮮半島との関わりの強さが窺える。後期から奈良時代にかけては、柵列や溝によって区画された大型の倉庫群や建物群が各所に営まれており、那津官家や早良郡衙に関わる施設の存在が指摘される。早良平野は律令期には早良郡にあたり、「和名抄」とによると、比伊、能解、額田、早良、平群、田部、曾我の7郷が存在していた。本遺跡群はこのうち田部郷に含まれるものと考えられる。中世では、戦国期の遺構が顕著にみられ、濠で方形に区画された遺構群が数箇所で確認されており、大内氏支配下で設けられた郡代や在地の有力土豪の城館である可能性が考えられる。

III. 調査の記録

1. 概要

1) 調査の経過

有田遺跡群第270次調査区は、早良区小田部五丁目41番地内〔住居表示：5丁目5-11〕に所在する。調査前は宅地で既存の住宅が解体された後、概ね0.5～0.6mの盛土造成が行われていた。盛土が行われた時点の地表面の標高は約9.9mである。また、調査対象地は現況で周辺道路よりも1.5m程度高い。調査の対象は「I.-I 調査に至る経緯」に記したとおり、敷地全体の359.47m²としたが、敷地は既存建物建築時に南～西側にかけて擁壁が作られており、また南東側には出入口のスロープがあったこともあり、敷地の外周部分は既に削平を受けている部分が多く、また周辺の安全対策上、実際の調査面積は179m²となった。

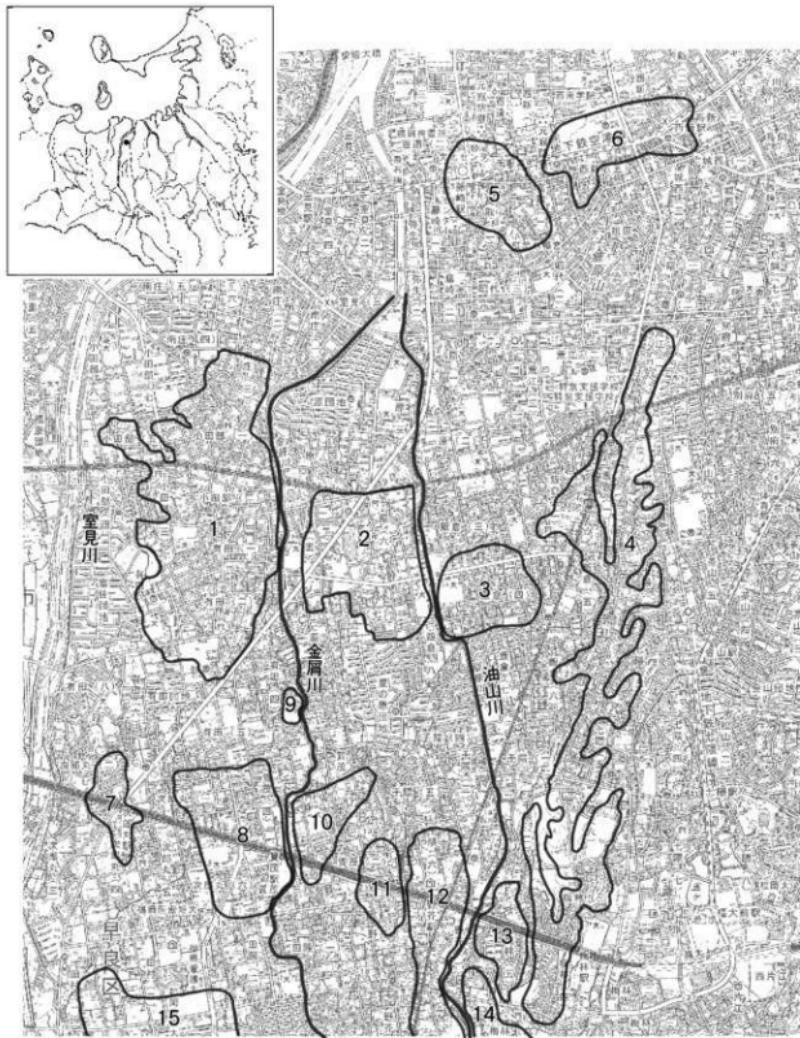
発掘調査は、令和元(2019)年9月17日に開始した。当初は、調査対象範囲全体の表土鋤取りを行う予定で調整されていたが、予想以上に盛土が厚く、出土の搬出が全て行えなかったこと、さらに、調査時の出土を場内で処理する必要があったため、調査範囲の西側4/5程度(I区)を先行して調査し、排土反転後、残る東側1/5程度(II区)の調査を行うこととした(第4図)。

調査はまず、重機による表土剥ぎ取りに着手し、その後機材の搬入や環境整備を行った。重機により地表下約0.5～0.6cmまで掘り下げ、褐色を呈する鳥栖ローム層上面で遺構・遺物を検出した。遺構検出面の標高は約9.4mである。調査は、人力による遺構検出や掘削を行い、適宜、写真撮影や1/10・1/20の図面を作成して記録した。10月9日にI区の全景写真を撮影し、記録等の作成を行った後、10月17日に反転し、II区の調査を開始した。I区と同様に遺構の検出・掘削、写真撮影、図面作成等の作業を行い、10月28日にII区の全景撮影を実施し、翌29日には機材等撤収し、第270次調査の工程を完了した。

2) 調査の概要と基本層序

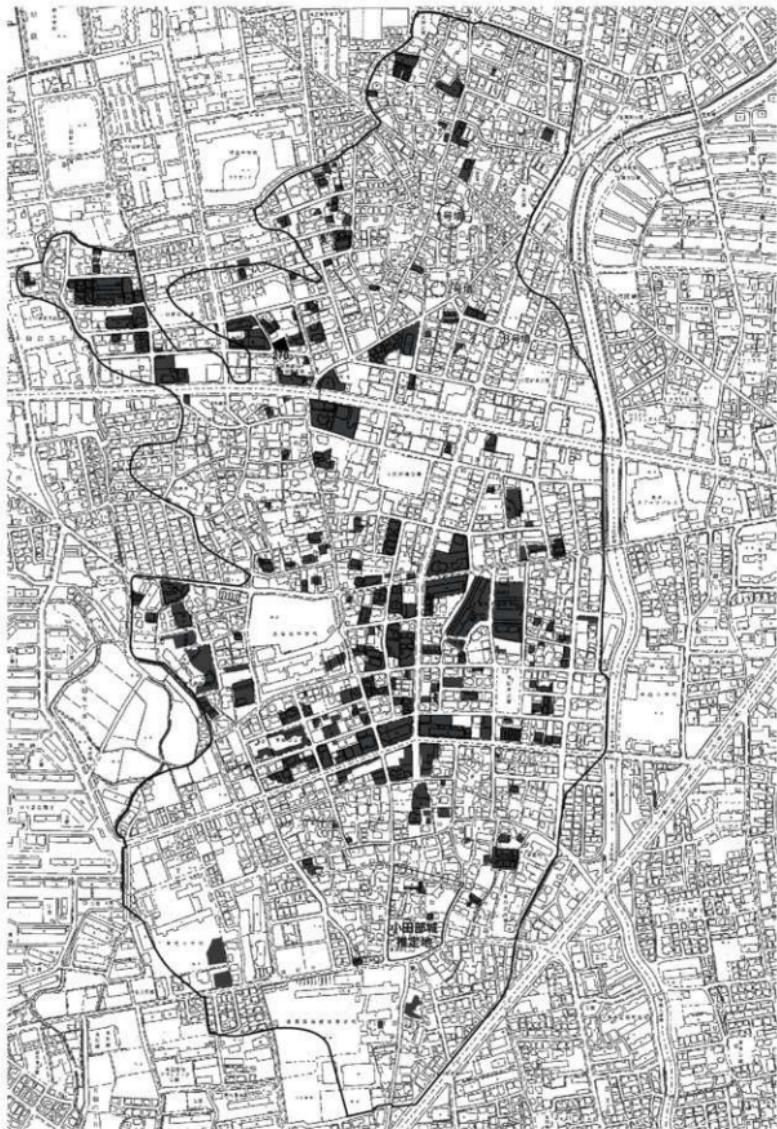
第270次調査地は、有田遺跡群が展開する台地の8つの突出部のうち、東から5つ目の尾根上に位置する。この突出部は国道202号線に架かる小田部横断橋付近から北西方向に延びており(第1・2図)、調査地はこの尾根の頂部附近にあるものと考えられる。

調査では、盛地表面下0.5～0.6mの鳥栖ローム層上面で、貯蔵穴、竪穴住居、掘立柱建物、方形土坑、土坑、溝、柱穴、ピット等を検出した(第5図)。調査区の基本的な層序について、第5図右下に示した調査区北壁の土層図に基づいて記述する。北壁土層では、既存建物解体に伴う盛土上面が標高約9.9m、盛土が約0.4m程度盛られ、その下に旧表土および西側では褐色粘質土の遺物包含層が0.15～0.2cm程度地形に沿うように北側から南側に傾斜しながら堆積する。その下が遺物検出面であ



- | | | | | | |
|---------|-----------|-----------|---------|-----------|---------|
| 1 有田遺跡群 | 2 原遺跡 | 3 原東遺跡 | 4 飯倉遺跡群 | 5 藤崎遺跡 | 6 西新町遺跡 |
| 7 次郎丸遺跡 | 8 次郎丸高石遺跡 | 9 有田木坪遺跡 | 10 免遺跡 | 11 野芥大藪遺跡 | |
| 12 野芥遺跡 | 13 飯倉日遺跡 | 14 クエゾノ遺跡 | | | |

第1図 有田遺跡群および周辺遺跡位置図(1/25,000)



第2図 有田遺跡群調査地点位置図(1/7,500)

る鳥栖ローム層となる。北側は、既存のブロック塀を施工する際に掘り込んでおり、掘削がこの鳥栖ローム層まで及んでいる。

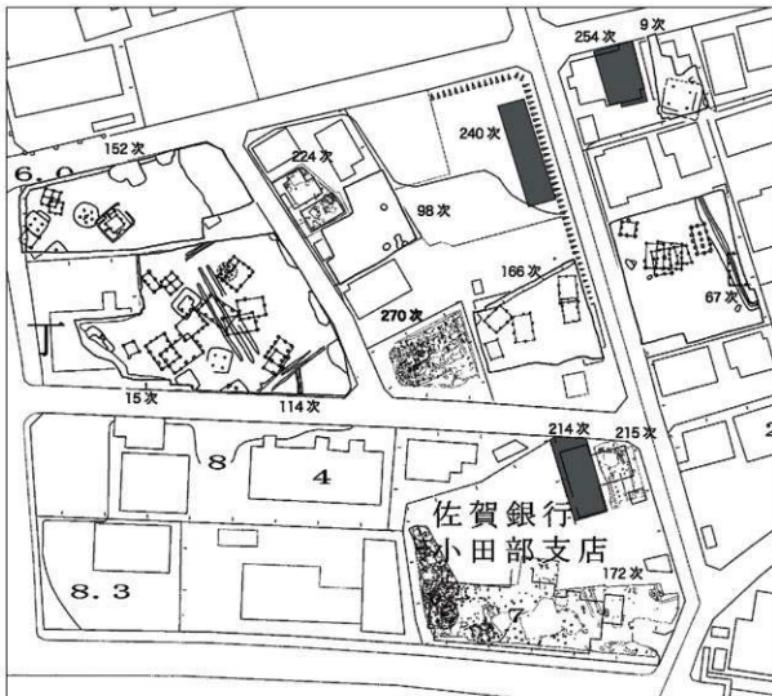
2. 遺構と遺物

調査はI区とII区とに分けて実施したが、遺構や遺物等は検出された区による区別はせず、遺構の種別ごとに報告する。検出した遺構には、01から始まる遺構番号を付しており、欠番はあるが重複はない。以下の報告にあたっても、原則として調査時の遺構番号を用い、この番号と遺構の種別を示す略号とを組み合わせて表記する。また、掘立柱建物を構成する柱穴については、調査時点で付した番号を整理報告時にP1から順に振り替えたものもある。

1) 貯蔵穴 (SU)

貯蔵穴として2基の遺構を報告する。どちらもSC1と重複し、貯蔵穴2基が埋没した後に、SC1が営まれている。

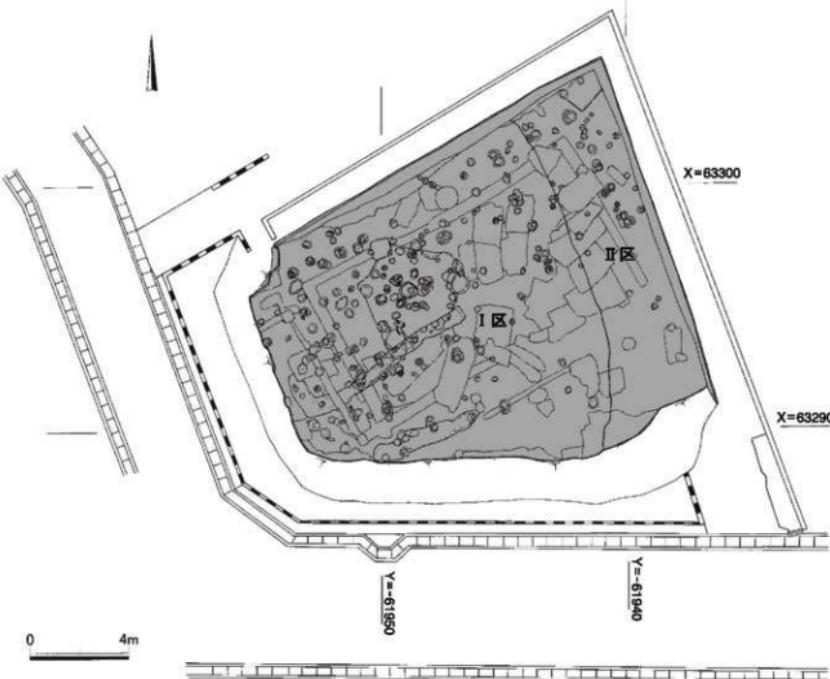
SU147(第6図) 調査区の中央付近に位置する。SC1と重複し、これよりも古い。断面はフラスコ状を呈し、開口部は長軸1.25m、短軸0.9m、高さ0.45mを測り、西側は15cm程度のステップ状となる。開口部より少しずばり、0.45m程度下でややハの字状に開きはじめ、0.3~0.35mほどで部屋状になる。一部肩部分が崩落している分があり(第6図破線部分)、本来は台形に近い形状と考えられる。穴部分は天井部分の長軸0.75m(崩落部分を合わせると約1m)、短軸0.8mを測る。下部の最も膨らんだ部分は長軸1.65m、短軸1.15m、底部では長軸1.5m、短軸0.96m、全体の深さは現状で1.7mを測る。穴



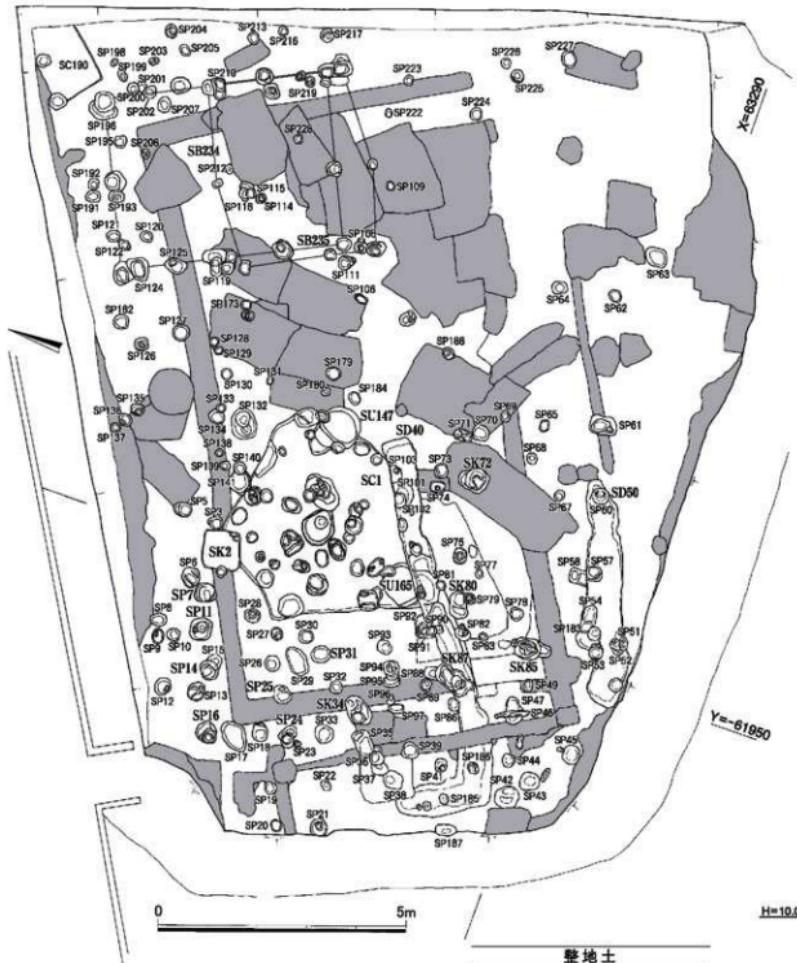
第3図 調査地点と周辺の遺構配置図(1/1,000)

部分の壁面には石斧等の工具による掘削の痕跡が明瞭に残っていた。埋土は下部が褐色粘質土および黒褐色粘質土で水平に近い堆積状況だが、中ほどから上部は黄褐色粘質土でロームのブロックを多く含む部分もある。下部は自然に埋没したようだが、上部は北側から南側に向かって斜め方向に厚くなっている状況から、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は、埋土中から散在的に出土したが、特に東側底部付近の床面よりやや上辺りで完形の甕を含む土器がまとめて出土している。

出土遺物(第7・8図) 1~7は弥生土器の甕で、1は、如意形口縁をもち、口径23.0cm、底径7.8cm、器高26.8cm。口唇部はわずかに肥厚させ、刻み目が施される。底部には焼成後に直径2cm程度の穿孔が施され、瓶として利用されたものである。外面は粗いが短い単位の縦方向の刷毛目。口縁部内面は横方向の刷毛目。胴部はナデ調整。内面部付近には煤が付着する。2は甕口縁部片で、やや内傾気味に立ち上がり口唇部とその下に断面略台形の突帯が巡り、刻み目が施される。外面は横方向の刷毛目後、指押さえされるが、やや粗く、接合痕が残る。内面は板状工具によるナデ調整。外面には一部煤が付着する。3は如意形口縁をもつ甕口縁部で、口径は15.4cmに復元できる。全体に磨滅するが外面はミガキ、内面はやや細い板状工具によるナデ。4は口径18.3cm、底径7.8cm、器高19.7cm。完形に近いが、被熱により胸部付近が剥離し、赤変する。全体に歪みが大きく、器壁が厚い。口縁部から胸部上部にかけて厚く煤が付着する。内外面とも板状の工具によるナデ調整。6は如意形口縁をもつ甕で完形である。口径13.6cm、底径5.8cm、器高13.8cm。外面口縁部下には一部条痕が残るが、内外面とも板状工具によるナデ調整。外面口縁部周辺から内面にかけて煤が付着する。7は胸部の一部が欠損しているため、図上で復元した。全体に器壁が厚い。口縁部内面に刷毛目、胴部内面には工具によるナデの痕跡が残る。口縁部周辺を中心で煤が付着する。8~14は胸部から底部片で、8は甕の底部か。底径8.1cm。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明瞭。9・10・11は底部が強く張り出す。9は底径6.1cm、10は底径7.1cm。上



第4図 調査区位置図(1/200)



げ底であり、丁寧な指押さえ後、ナデ調整。10の外間に細かい単位の板状工具によるナデがみられる。11は底径7.0cmで、内外面とも指押さえの後、粗くナデ調整。外面には煤が付着する。12は底径6.2cmで底部はわずかに上げ底となる。丁寧な指押さえ後、ナデ調整。13は底径7.4cmに復元できる。内面は指押さえ、板状工具によるナデの後、丁寧なナデ調整。14は壺の底部の可能性もある。底径9.5cm。内外面とも丁寧なミガキがみられ、内面にはわずかに赤色顔料の痕跡が残る。15~18は石器である。15は花崗岩製の磨石で、全長10.8cm、幅7.6cm、厚さ9.2cm。

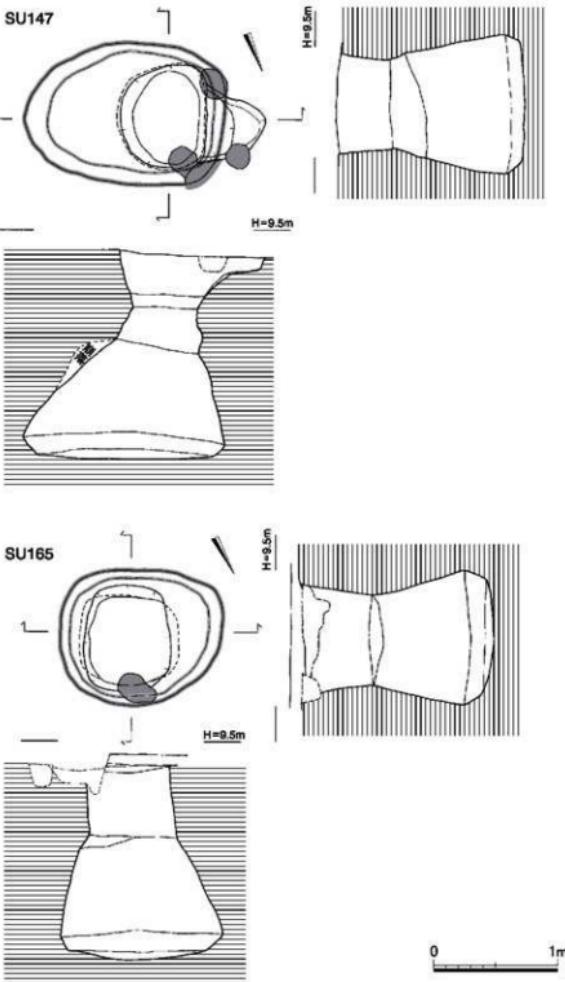
第5図 造構配置図(1/100)および調査区基本土層略図(1/10)

重量616.05g。全体に摩耗するが、一部に自然面が残り、敲打痕もみられる。16は花崗岩製の敲石で、残存長15cm、残存幅9.0cm、残存厚7.5cm、重量は975.5g、磨石として使用後、敲石として利用したものか。敲打痕は結晶の剥離である可能性もある。17は砂岩製の台石で、残存長11cm、残存幅6.7cm、残存厚3.9cm、重量397.05g。砥石として使用後、台石に転用したものか。被熱により全体が赤変している。18は砂岩製の砥石で、残存長6.7cm、残存幅6.0cm、残存厚2.7cm、重量は95.6g。大部分が欠損するが、底面として使用された部分は皿状に凹む。

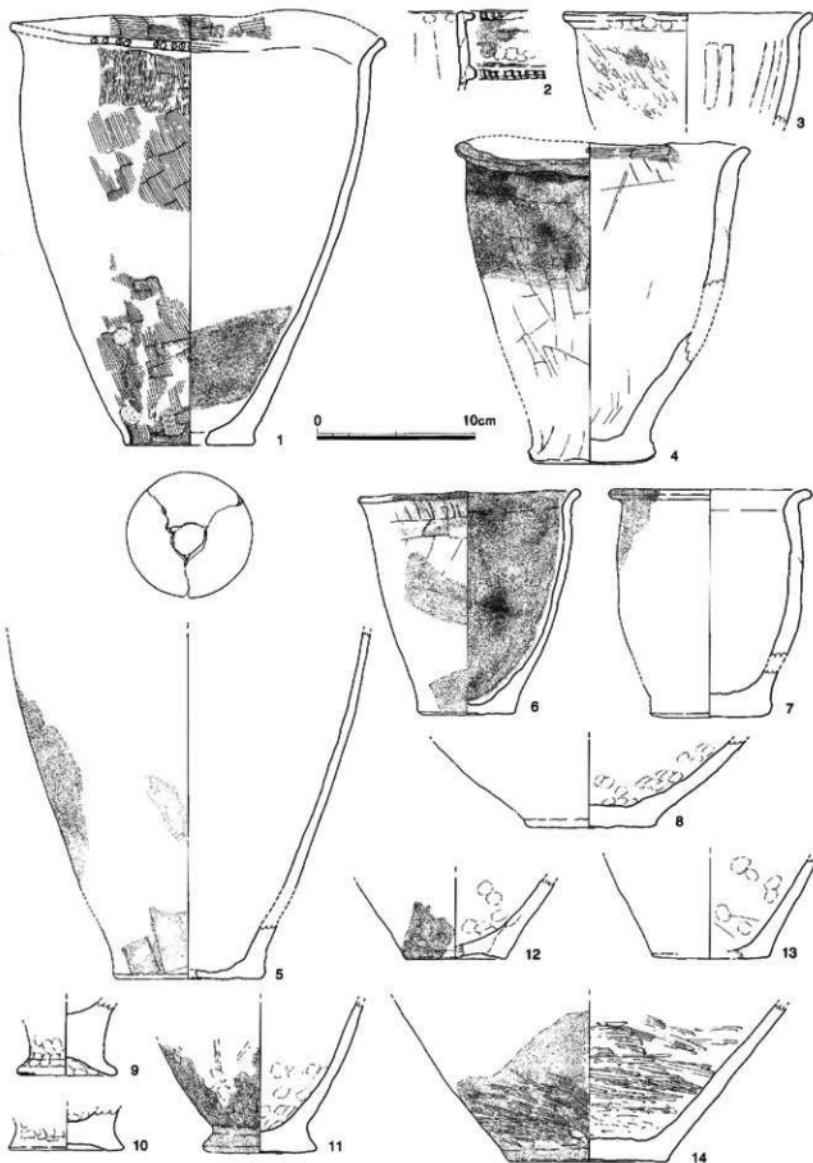
SU165(第6図) 調査区の中央やや西寄りに位置する。SC1、SD40と重複し、これらよりも古い。開口部は長軸0.89m、短軸0.7mで、そこからやや内側にすぼまりながら0.5mほど下がったところで外側に膨らみはじめ、略台形状を呈する穴部へと続く。穴部部分の長軸は1.3m、短軸1.1mで床面よりも0.12~0.13m程で最も広くなる。床面は長軸1.1m、短軸0.9mを測り、平坦ではなくやや窪む。全体の深さは最大1.63mである。埋土は下部が褐色粘質土で水平に近い堆積状況だが、中ほどから上部は黄褐色粘質土でロームのブロックが多く含む。遺物は、埋土中から散在的に出土し、小片が多いが、下部ほど大きな破片がみられた。

出土遺物(第9図) 19~23はSU165から出土した。出土遺物は小片が多く、図示できたものは少ない。19は壺の頸部から肩部にかけての破片である。肩部が大きく開き、最大径が肩部付近となる器形のものであろ

う。くびれ部分には2条の沈線が巡る。20は如意形口縁をもつ甕で、底部付近は欠損している。口唇部には刻み目が施される。内外面ともナデ調整で、内面には指押さえおよびナデの痕跡が明瞭に残る。外面下部と内面の下端部の一部に煤が付着する。21・22は甕の底部。21はわずかに上げ底となる。どちらも底部に径2cm程の穿孔が施されており、傾として使用されたものか。磨滅により調整は不明瞭。23は玄武岩製の打製石斧である。刃部の片面は研磨されているがその裏面は打ち欠いた痕跡があ



第6図 SU147・SU165 実測図(1/40)



第7図 SU147 出土遺物実測図①(1/3)

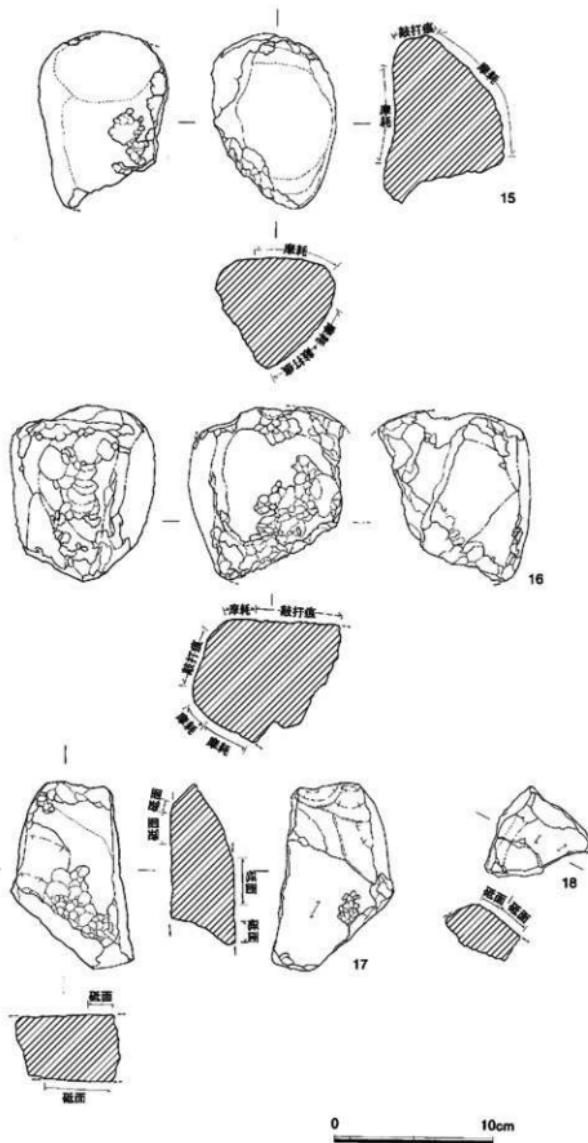
り、折れた石斧の再生を試みたものか。

2) 壓穴式住居 (SC)

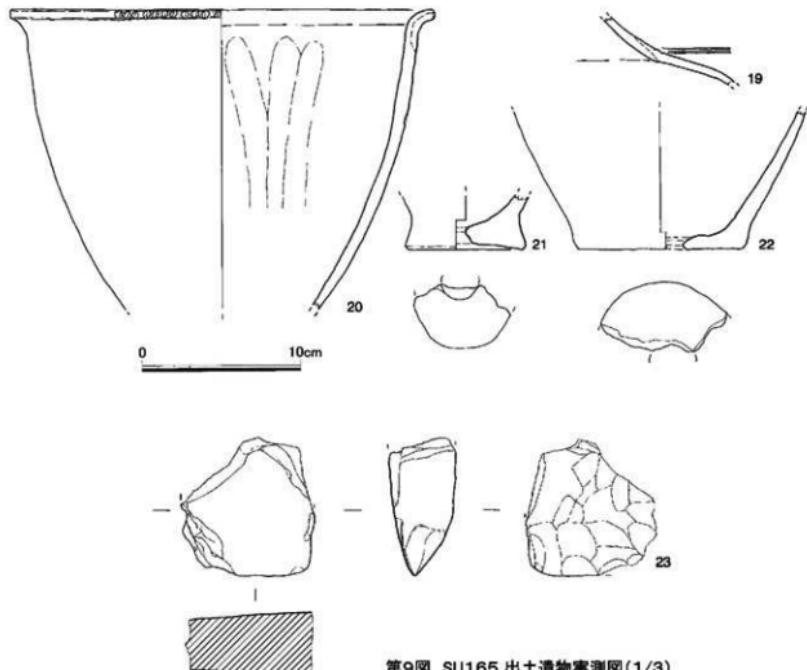
堅穴住居として2棟を報告する。SC1は検出時にも掘り方が曖昧で、掘削後も不整形で歪な形状であり、炉跡や壁溝などの住居とみなしえ得る構造もみられなかったため、堅穴住居としてよいか疑問は残る。

SC1 (第10図) SC1は調査区の中央北西寄りに位置する。現状で平面形は不整形な五角形に近く、かなり歪な印象である。北側でSK2と南側でSD40と重複し、これらに埋されており本来の形状は不明瞭である。長軸4.2m、短軸3.5mで、深さは5cm程度を測る。主柱穴は中央のSP156やSP165等が考えられるが判然としない。埋土は暗褐色粘質土で、一部褐色・黄褐色粘質土の貼床とみられる部分があった。その直上で、第11図遺物番号26のやや大型の石製穂摘具が出土した。埋土中からは、弥生時代前期から中期にかけての甕等の破片や古式土師器の壺等の破片、奈良時代の須恵器・土師器片、鉄滓などが出土した。

出土遺物 (第11図) 24～30は埋土中から出土した。24は弥生土器の壺口縁部片で、口縁端部に略台形の突帯が巡り、刻み目が施される。25は弥生土器壺の底部。復元底径は8.9cm。全体に磨滅し、調整等は不明だが、底部外面に黒斑がみられる。26は砂岩製の石製穂摘具で、残存長は12.7cm、幅9.5cm、厚さ5mmを測る。紐通し孔は二ヶ所あり、孔径



第8図 SU147 出土遺物実測図②(1/3)



第9図 SU165 出土遺物実測図(1/3)

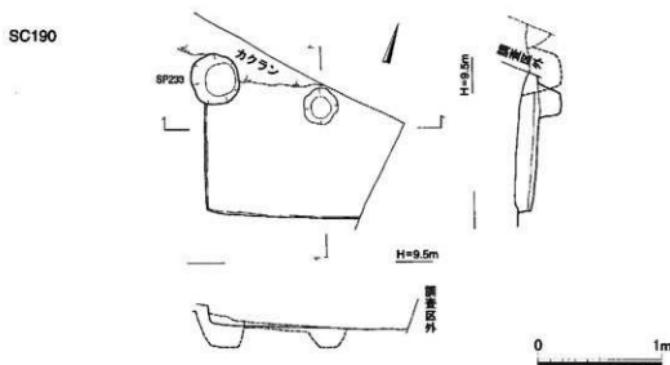
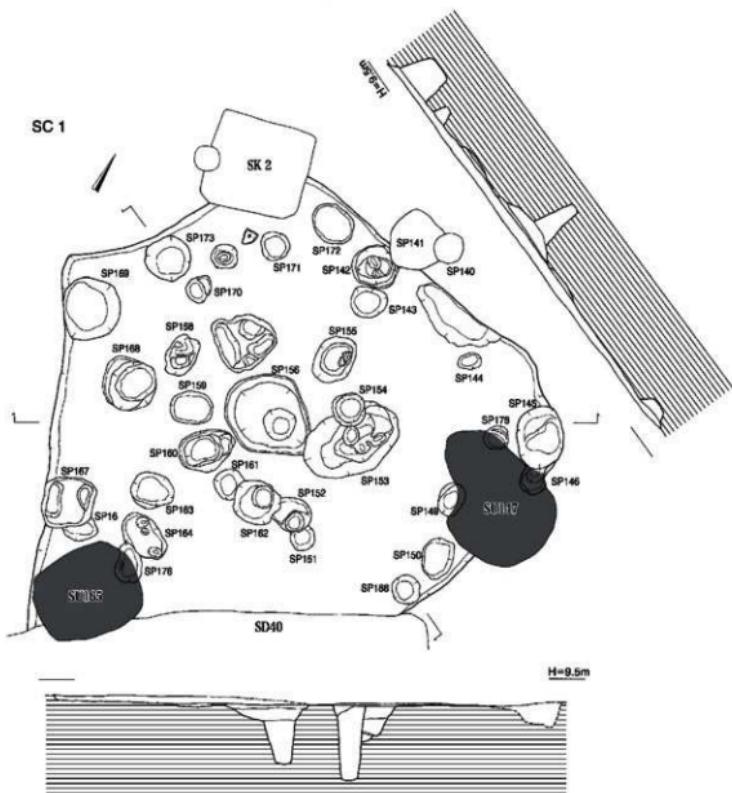
は6mmである。表面は研磨されるが、磨滅・剥離が著しい。27は須恵器壺蓋で、復元口径は9.9cm、外側は強い横ナデ。28は須恵器壺身の底部で、復元底径は10cm、底部には略方形の低い高台が付く。29-30は楕円形鋸治溝で、29は全長3.65cm、幅3.1cm、厚さ2.0cm、重量35.7g、30は全長4.8cm、幅3.4cm、厚さ2.5cm、重量43.2gを測る。30は灰色から黒灰色に炭化した部分が多くみられる。31~35はSC1内のピットから出土した。31・32はSP154から出土した土製品で、装飾品か。31は全長2.2cm、径0.7cm、重量1.1gを測り、穿孔が施される。32は全長4.0cm、最大径1.1cm、重量は4gで、全体に丁寧なナデ調整で、一部黒斑がある。33はSP155から出土した須恵器壺身で、口径12.3cmに復元できる。腹部は時計回りのヘラケズリ、内面から外面上部は横ナデで仕上げられる。底部にヘラ記号があるが一部のみ残存する。34は須恵器壺で、底径は9.9cmに復元できる。底部には高さ0.8cm程度の高台が貼付される。35はSP168から出土した炉壁付流動溝で、全長6.55cm、幅5.0cm、厚さ4.7cm、重量は74.6gを測る。表面は黒色を帯び、一部はガラス化している。炭化物が付着する。柱穴の出土遺物から7世紀前半頃の遺構とみられる。

SC190(第10図) SC190は、調査区の北東隅で検出した。北側の一部は後世の攪乱により壊されている。平面形は方形とみられるが、大半は調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。現状で、南北1.2m、東西1.6m、深さ9~17cm程度が残存する。埋土は、暗褐色粘質土で炭化物やローム小ブロックが少量混じる。弥生土器や土師器片がわずかに出土したが、図示できる遺物はない。

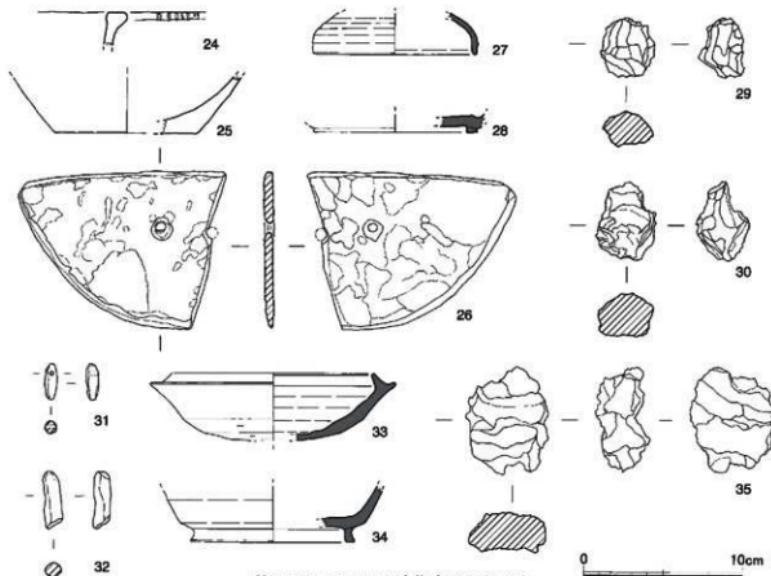
3) 堀立柱建物(SB)

掘立柱建物として2棟を報告する。調査時に認識できたものはSB234であるが、I区とII区にまたがっている。SB235は調査終了後に図上で復元したものである。

SB234(第12図) SB234は調査区の北東側に位置し、I区とII区にまたがって検出した。桁行3間×



第10図 SC1・SC190 実測図(1/40)



第11図 SC1 出土遺物実測図(1/3)

梁行2間の建物で、主軸はN-25°-Wにとる。桁行は4.6m、梁行は3.5mを測る。柱穴は浅いもので深さ0.3m、深いものは0.7m程度である。柱間は一定ではないものの、桁行が1.6m～2.0m、梁行が1.3m～1.9m程度を測る。柱穴が重複している箇所もあり、何度かの建て替えも想定されよう。

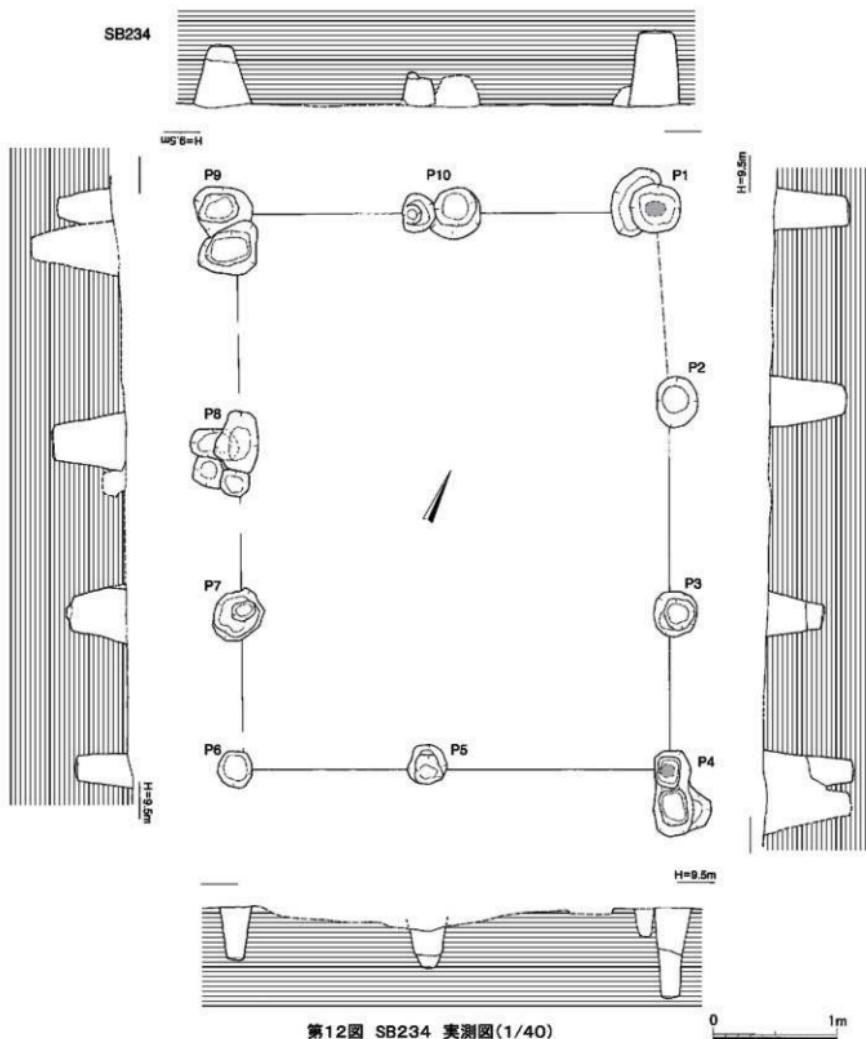
SB235(第13図) SB235は岡上で復元したもので、やや強引な復元かもしれないが、獨立柱建物の可能性がある柱穴のまとまりとして認識できたものである。調査区の北東側に位置し、SB234と南側で重複し、SB234よりも新しいと考えられる。長軸の方を梁行すると、桁行2間×梁行2間で東西方向に長い建物で、主軸はN-61°-Eにとる。梁行は、2間したが、P1とP2・P7とP6間が1.8m程度と広く、P2とP3・P6とP5の間は0.9mと狭く一定ではない。桁行の柱間も1.8～2.0m程度であり、P4とP8はやや外側に開く。

出土遺物(第14図) 36～40はSB234の柱穴から出土した。36はP1出土。須恵器壺蓋を模倣した土師器壺蓋の口縁部片か。やや赤みを帯びた褐色を呈する。外面は板状工具による横方向のナデが施される。37・38はP3から出土した。37は土師器壺の口縁部片か。磨滅が著しく調整は不明瞭だが、外面には縱方向の刷毛目がみられる。胎土には砂粒が多量に混じる。38は土師器壺の胴部片か。外面には人面のような墨書きがみられる。39はP4から出土した土師器壺。口径は12.3cm、底径は8.0cmにそれぞれ復元でき、器高は3.4cmを測る。内外面は磨滅し、調整は不明瞭。胎土には石英・長石等の砂粒が少量混じる。40はP7から出土した須恵器壺蓋で、復元口径は13.3cm、高さ1.8cmが残存する。焼成はやや悪く、軟質気味である。外面は反時計回りのヘラケズリにより仕上げられる。41はSB235のP7から出土した。須恵器壺で、底部には高さ0.7cmの高台が貼付される。元底径は10.0cm、高さ1.55cm程度が残存する。焼成は良好で、灰色を呈し、横ナデにより仕上げられる。8世紀から9世紀前半の所産とみられる。

4) 溝(SD)

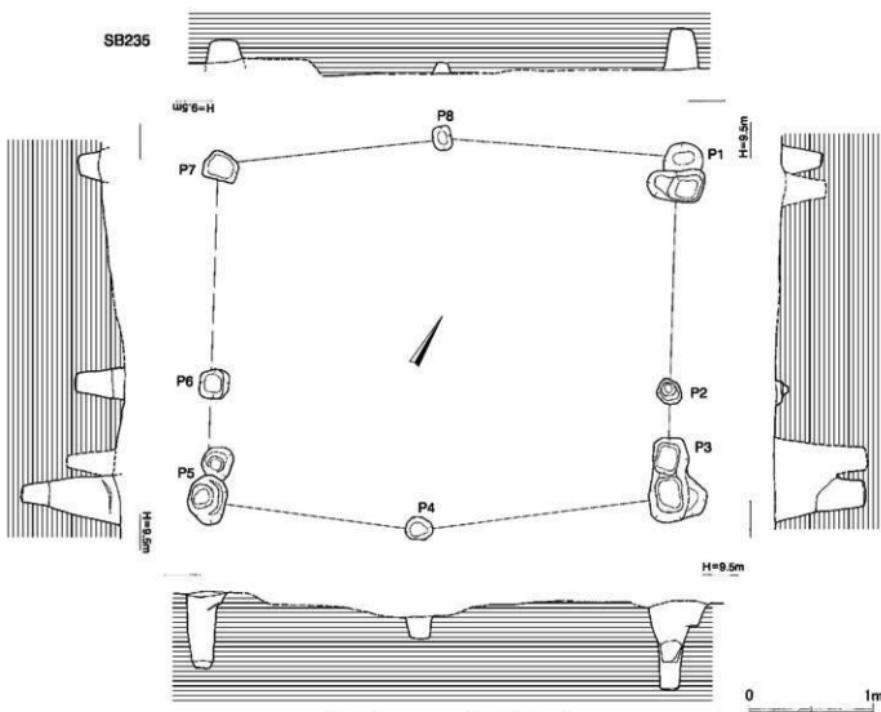
溝として2条の遺構を報告する。2条ともに削平を受けているためか浅く、底面は平坦に近い部分もあった。

SD40(第15図) SD40は調査区の中央部から西側に延びる溝である。東端部を起点とすると、南西方



第12図 SB234 実測図(1/40)

向に延び、7.6m程度で北西方向に屈曲し2m程続く。幅は狭い部分で0.45m、広い部分で0.7mを測り、深さは5~15cm程度である。SC1と重複し、これよりも新しい。溝の北側寄りに小穴があり、やや深く土坑状に掘り込まれた部分もある。何かしらの区画を意図したものか。埋土は暗褐色粘質土で、弥生土器や古墳時代の古式土師器片、奈良時代の土師器片、黒曜石片等が出土したが、図示できるものは非常に少ない。



第13図 SB235 実測図(1/40)

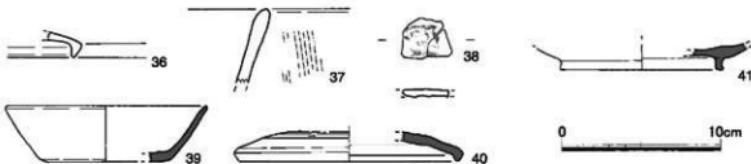
出土遺物(第15図) SD40から出土した遺物のうち2点を図示した。SD40の時期を直接的に示すものではないが、42は弥生土器壺の底部である。復元底径は7.0cmで高さ1.6cm程度が残存する。全体に風化・磨滅が著しく調整は不明瞭だが、全体にナデ調整か。43は壺棺の底部とみられ、復元底径は8.0cm、高さ2.6cm程度が残存する。全体に風化・磨滅が著しい。石英や長石等の砂粒が多量に含まれる。
SD50(第15図) SD50は調査区の南側西寄りに位置する。東端部を起点とすると、東西に延び、やや南北方向に振れている。全長4.6m、幅0.6~0.7mを測る。深さは0.5~0.6cm程度が残存する。北側の壁沿いに小穴が並び、SP172・SP169・SP168は約1.6mの間隔で並んでいる。何らかの区画を意図したものと考えられる。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物や焼土粒が多く含まれる。遺物は、弥生土器片や土師器片が出土しているが図示できるものはない。

5) 土坑(SK)

土坑として6基を報告する。土坑としたもののうち、土層断面をみると柱の痕跡があるものもあり、建物としてのまとまりを認識できなかったものの、建物やその他の構造物の一部としての性格を有するものも含まれている。

SK2(第16図) SK2は調査区の北側やや西寄りに位置する。平面形は略方形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さは0.25~0.3cmを測る。SC1、SP3と重複し、SP3よりも古く、SC1よりも新しい。中央付近の底面直上で土師器壺1個体分が出土した。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物や焼土粒が多く混じり、土師器や須恵器、鐵鋤などが多く出土した。

出土遺物(第17図) 44~51はSK2から出土した。44・45は土師器壺で、2個体のように図示したが、



第14図 SB234-SB235 出土遺物(1/3)

接合し、1個体である。復元口径は19.6cm、高さ13.9cmが残存する。内外面とも磨滅が著しいが、外面胴部は刷毛目、内面はヘラケズリにより調整される。外面胴部下位にはわずかに煤が付着する。46は土師器瓶もしくは鉢の口縁部分か。外面は横ナデ調。47は土師器杯蓋で、復元口径12.7cm。返しは断面三角形を呈し、内面は板状工具によるナデ、外面は横ナデ調整される。48~50は須恵器杯蓋である。48は天井部片で、ヘラ記号がみられる。49は復元口径13.7cmで、断面三角形の返しが付く。外面にはヘラ記号の一部とみられる沈線が残る。50は復元口径13.7cm、高さ2.15cmが残存する。外面は反時計回りのヘラケズリ、口縁部外面から内面にかけては横ナデ調整される。51は杯身で、復元口径は12.6cm、器高は1.8cmである。内面底部には2本の沈線があり、ヘラ記号か。8~9世紀代に位置づけられる。SK34(第16図) SK34は調査区の西側中央付近に位置する。長軸0.7m、短軸0.5mを測る。底面は階段状になっており、西側が深さ0.3m、東側は深さ0.5m程度である。土層断面の状況から、柱穴であった可能性が高い。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、ロームブロックを多く含み、炭化物や焼土粒が混じる。土師器や須恵器片が出土した。

出土遺物(第17図) 52はSK34から出土した。須恵器の杯身で、復元底径は13.0cm。外面底部周辺は反時計回りのヘラケズリ、内外面は横ナデ調整。底部に沈線があり、ヘラ記号とみられる。

SK72(第16図) SK72は中央付近やや南寄りで検出した。後世の搅乱により、上部は大きく削平されている。長軸0.62m、短軸0.5m、深さは0.25mを測る。平面形はいびつな楕円形で、底面は二段掘り状を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物や焼土粒、ロームの小ブロックを含む。弥生土器片・土師器片等が少量出土した。図示できる遺物はない。

SK80(第16図) SK80は調査区の中央西寄りで検出した。平面楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.4m、深さ約0.4mを測る。底面は東側が一段低くなり、二段掘りとなる。土層の状況から柱穴とみられ、底面には柱の当たりも残存する。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを多く含み、焼土粒・炭化物を少量含む。弥生土器片や土師器片・須恵器片が少量出土した。

出土遺物(第17図) 53はSK80から出土した。全長4.1cm、幅2.05cm、厚さ0.7cm、重量5.9g。台形様石器の未製品か。縦長の剥片を利用している。石材は安山岩とみられ、全体に磨滅している。

SK85(第16図) SK85は調査区の西側南寄りに位置する。長軸0.73m、短軸0.42m、深さ0.45mを測る。南側がやや浅く、テラス状になっており、北側が深くなる。土層断面の状況から柱穴と考えられ、径10cm程度の柱の痕跡が確認できる。埋土は暗褐色粘質土で、ロームの小ブロックを多く含み、炭化物・焼土粒が多く混じる。埋土中より弥生土器片・土師器片・黒曜石片が出土したが、いずれも小片で、図示できるものはない。

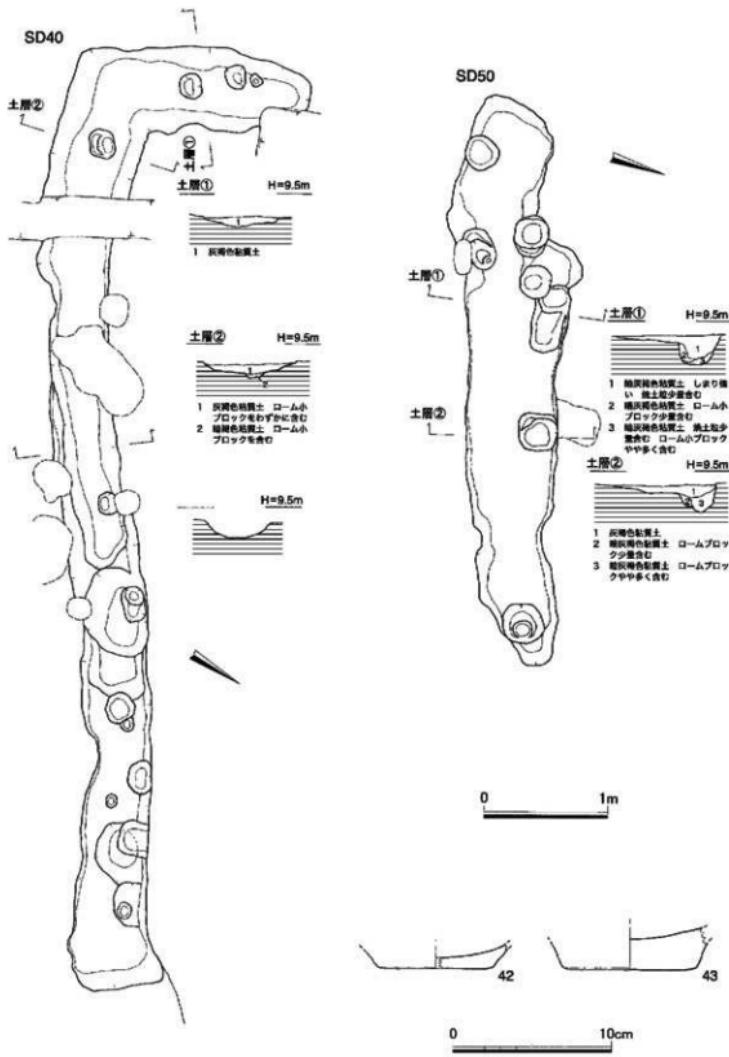
SK87(第16図) SK87は調査区の西側中央部やや南寄りに位置する。平面形はいびつな楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.4~0.45m、深さ0.2mを測る。SD40、SP88と重複し、SP88より新しく、SD40より古い。底面は二段掘り状となる。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを多く含み、炭化物粒が少量混じる。埋土から弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。

出土遺物(第17図) 55はSK87から出土した。弥生土器の甌底部で、復元底径は8.0cmを測る。外面は板状工具によるナデ、内面には指頭圧痕が残り、底部付近を丁寧に押された様子が窺える。内面には炭化物の痕跡が残存する。

この他に土坑から出土した遺物をここで報告する。54はSK82から出土した土師器杯底部で、断面三角形の低い高台が貼付される。器面全体に磨滅が著しい。復元底径は8.0cmを測る。

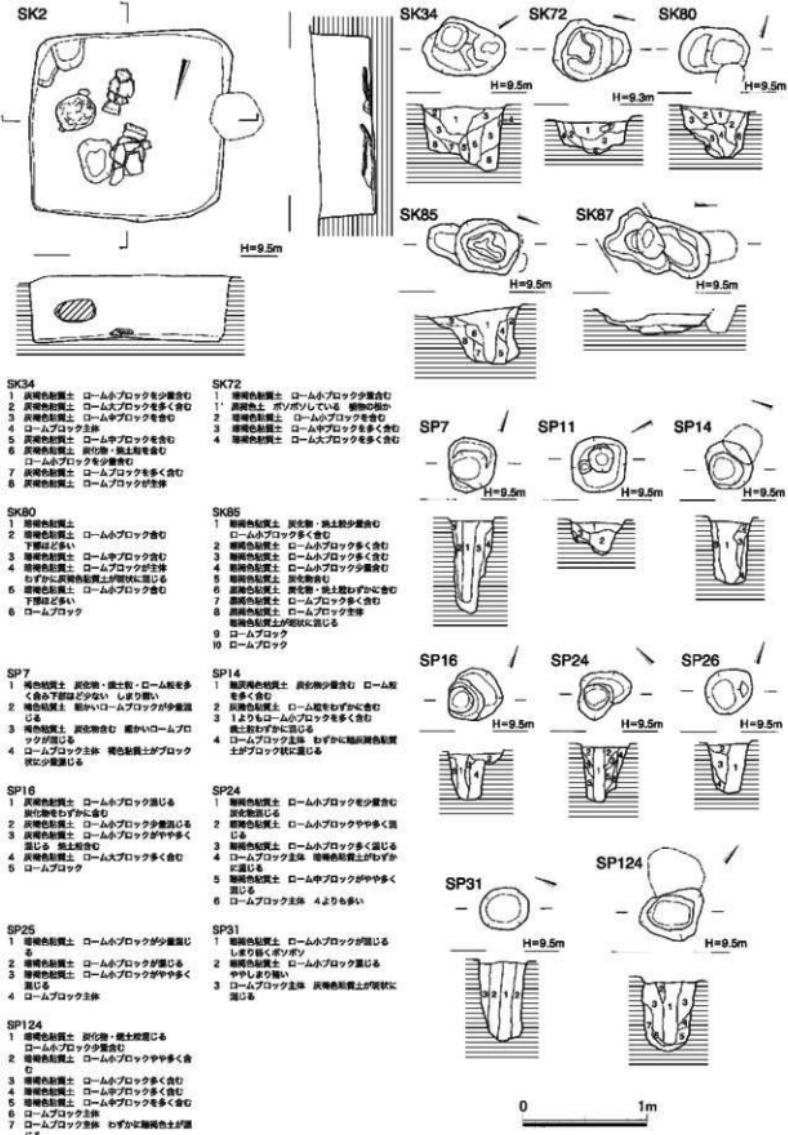
6) 小穴(SP)

調査では、多くの小穴を検出したが、その一部を報告する。報告するものは、明らかに柱穴とみられるもので、検出時にも柱痕跡が明瞭であり、土層断面にもその痕跡がしっかりと表れる。ただし、掘

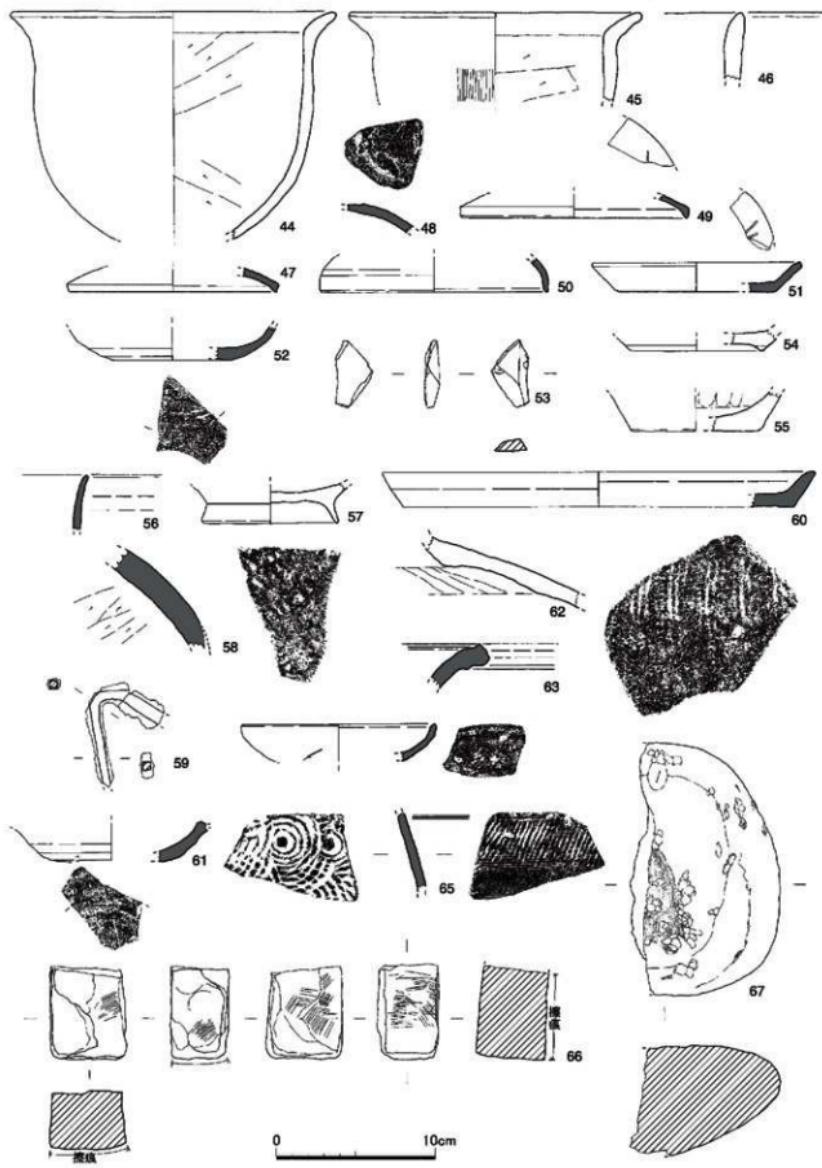


第15図 SD40・SD50 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

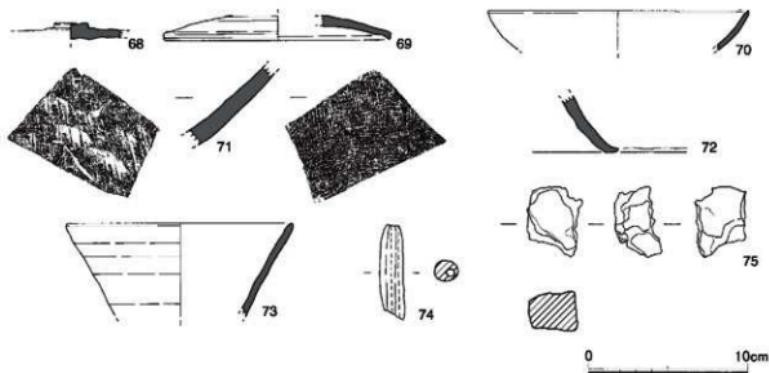
立柱建物として報告した2棟以外には、建物としてのまとまりを見出すことができなかった。調査区の西側にも、柱穴とみてよい小穴が多く存在するため、建物が展開していた可能性は高いと考えられる。SP7(第16図) SP7は調査区の北側や西寄りに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.45m、短軸0.4m、深さは0.8mを測る。径約10cmの柱痕跡が明瞭に残る。埋土は暗褐色粘質土で、ローム



第16図 土坑(SK)・小穴(SP)実測図(1/20・1/40)



第17図 土坑(SK)・小穴(SP)出土遺物実測図(1/3)



第18図 小穴(SP) 出土遺物実測図(1/3)

ブロックを多く含む。

SP11(第16図) SP11は調査区の北側やや西寄りに位置している。平面形は隅丸方形を呈し、一边約0.45m、深さ0.3mを測る。北側やや浅く、0.15m程度で二段掘り状となる。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを含み、炭化物粒が混じる。

SP14(第16図) SP14は調査区の北西隅近くに位置する。平面形はややいびつな梢円形で、長軸0.42m、短軸0.4m、深さ0.55mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを多く含み、焼土および炭化物粒が混じる。径10~12cm程度の柱痕跡が残る。

SP16(第16図) SP16は調査区の北西隅に位置する。平面形はいびつな円形を呈し、径0.45~0.5m、深さは0.4mを測る。二段掘り状となっており、東側が浅く、西側が深い。8~10cm程度の柱痕跡が残る。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを多く含み、炭化物・焼土粒が多く混じる。埋土中から土師器、須恵器片が出土したが小片のため図示できなかった。

SP24(第16図) SP24は調査区の北西隅近くに位置する。平面形は梢円形と円形を合わせたようないびつな形状で、長軸0.42m、短軸0.4m、深さ0.5mを測る。径10cmの柱痕跡が残り、底面には柱の当たり痕跡がある。埋土は暗褐色粘質土でロームブロックを多く含む。埋土中から土師器、須恵器片が出土した。

出土遺物(第17図) 57・58・59はSP14から出土した。57は土師器梶の底部で、底径は8.3cmに復元できる。底部にはやや外に開く、高さ1.4cmの高台が貼付される。全体に磨滅が著しい。58は土師器壺の肩部片で、磨滅が著しいが、外面には細長い連続した梢円形状を呈するタタキの痕跡が観察できる。59は鉄釘で、頭部および先端部は欠損する。全長は約9.4cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm、重量は13.8g。太い部分は0.8cmである。

SP25(第16図) SP25は調査区の北西側に位置する。平面形は不整な梢円形で、長軸0.4m、短軸0.36m、深さは0.4mを測る。径12cm程の柱痕跡がある。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロック、炭化物粒が多く混じる。

出土遺物(第17図) 60はSP25から出土した。須恵器の盤で、口径26.6cmに復元でき、器高は2.15cmを測る。底部はヘラケズリ、内外面は横ナデ調整される。

SP31(第16図) SP31は調査区の西側やや北寄りに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.4m、短軸0.36m、深さ0.66mを測る。径10cm程度の柱痕跡があり、底面には柱の当たり痕跡が残る。埋土は暗褐色粘質土で、ロームブロックを多量に含み、ロームブロックが主体を占める部分もある。

出土遺物(第17図) 61はSP31から出土した。須恵器の环身で、受け部は欠損している。外面底部附近はヘラケズリ、内外面は横ナデ調整される。底部にはヘラ記号の一部が残存する。

SP124(第16図) SP124は調査区の北東側に位置する。平面形はいびつな長梢円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.4m、深さ0.6mを測る。埋土は黒褐色粘質土で、ロームブロックを多く含み、炭化

物・焼土粒を多く含む。SB234のP9と重複し、これよりも新しい。P9が掘り直されたものという理解もでき、SB234の一部とする方が適しているかもしれない。

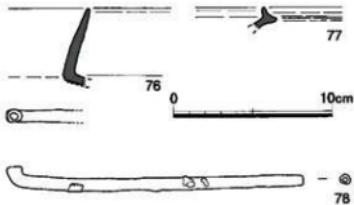
出土遺物(第18図) 68・69はSP124から出土した。68・69は須恵器の壺蓋で、68は平たい円形の摘みが付く。摘みの径は2cmである。69は復元口径13.8cm、天井部付近は反時計回りのヘラケグリ、内外面は横ナデ調整。断面三角形の低い返しが付く。

その他の小穴から出土した遺物も合わせてここで報告する。56はSP19から出土した、須恵器壺の口縁部から胴部片。全体に横ナデ調整。62は

SP36から出土した。土師器の壺の肩部から胴部上位の破片か。外面には平行したタタキ目がみられ、内面頸部直下にはヘラ状工具により斜め方向に強くナデ調整される。63はSP75から出土した、須恵器壺の口縁部片。64はSP94から出土した。須恵器壺の口縁部から胴部片で、復元口径は11.8cm。外面胴部下位に沈線がみられる。ヘラ記号か。65はSP210から出土した。須恵器壺の胴部片か。図の上部には2条の沈線が巡り、外面は斜め方向の平行タタキ後ハケメ、内面には当て具痕が残る。66はSP174から出土した。粘板岩製の砥石で、一部欠損するが、図の下端部は打ち欠いた痕跡が残る。細かい擦痕が4面に認められる。長さ5.75cm、幅4.6cm、厚さ3.55cm、重量193.8g。67はSP111から出土した。台石とみられる。花崗岩製で、半分程度が欠損する。一部に敲打痕がみられ、全体に煤が付着する。70・72はSP179から出土した。70は土師器壺の口縁部片で、口径は15.9cmに復元できる。口縁部端直下内面には、細かい沈線状の溝が巡る。全体に黒色を呈する。72は土師器高杯の脚部鉢で、端部は横方向にややつまみ出している。71はSP181から出土した。須恵器壺の胴部下位の破片か。外面には細かい格子目タタキの後、下位のみハケメ調整され、内面には当て具痕が残る。当て具は円形のよくみられる同心円文ではなく、ヘラのような形状のものに5本程度の溝を切った工具が使用されている。73はSP213から出土した。須恵器の長頸壺の口縁部から頸部片。口径は13.7cmに復元でき、内外面とも横ナデ調整。74・75はSP207から出土した。74は土盤で、一部欠損する。全長5.9cm、径1.4×1.3cm、孔径4×5mm、重量9.3gを測る。外面全体に刷毛目の痕跡が残る。75は楕円錐治溝で、長さ4.3cm、幅3.05cm、厚さ2.2cm、重量49.4gを測る。石英や長石等の砂粒や土が付着している。全体に灰黒色を呈する。

7) その他の出土遺物(第19図)

ここでは、遺構以外から出土した遺物を報告する。76・77は表土鋤取りの際に出土した。76は須恵器の壺もしくは壺の口縁部から肩部片で、外面には板状工具によるナデ、内面は横ナデ調整される。77は須恵器壺身で、やや低い受け部片である。全体に横ナデ調整される。78は調査区の北側から西側に堆積していた遺物包含層中から出土した、青銅製のキセルか。雁首部分から吸い口までが一錫で、通常はラウとなるところまで金属製である。



第19図 その他の出土遺物(1/3)

IV. 結語

第270次調査の成果について簡単にまとめたい。今回確認できた最も古い遺構は、弥生時代前期後半の貯蔵穴であり、尾根の頂部に近い本調査区で検出されたことは、当時の土地利用の在り方を考える上で興味深い。また、削平されてはいるものの、上部の構造が分かつたことは貴重な成果と言える。確認できた遺構、とくに小穴・柱穴の多くは、7~8世紀代のものと考えられる。次に、8~9世紀のものとみられる2棟の掘立柱建物が調査区の東側で確認されたが、これは、本調査区の東側隣接地で実施された第166次調査区で確認された掘立柱建物群と主軸方位がほぼ同じであり、さらに東側で実施されている第67次調査でも同様の主軸方位の建物が検出されている。これらは、同時期の建物群としてまとまりをもつものとみられ、この時期の集落や建物群の展開を考えるうえで重要な成果である。また、本調査でも多くはないが、鉄鋤が出土しており、この周辺で、鉄の加工・鍛冶が行われていた可能性があり、今後の周辺での調査成果も期待される。

写真図版1



写真1 I区 調査区全景(北東から)

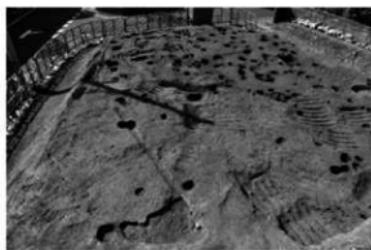


写真2 I区 調査区全景(東から)



写真3 I区 調査区全景(南西から)



写真4 調査前の状況(南東から)



写真5 調査前の状況(南から)



写真6 II区 調査区全景(北西から)



写真7 II区 調査区全景(南東から)



写真8 II区 調査風景(北から)



写真9 I区 調査区北壁土層(南東から)



写真10 II区 調査区東壁北側土層(南東から)

写真図版3



写真11 SU147 土層断層(東から)



写真12 SU147 遺物出土状況(北から)

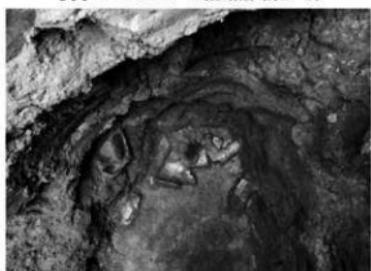


写真13 SU147 遺物出土状況 近景(北から)



写真14 SU147 振削当時の工具痕(北から)

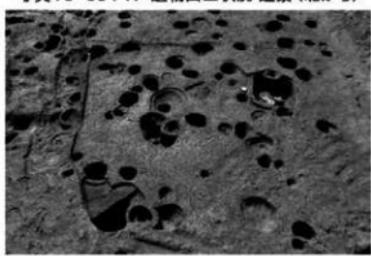


写真15 SC1 全景(北東から)



写真16 SC1 石製穂摘具出土状況(東から)

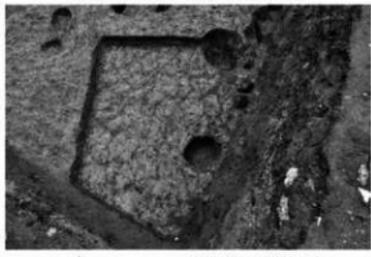


写真17 SC190 完掘状況(北から)

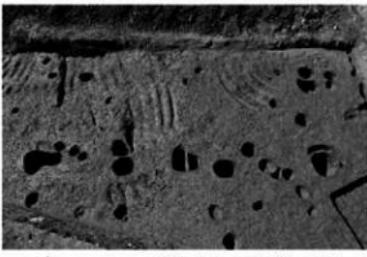


写真18 SB234 東半部(Ⅱ区側 北西から)

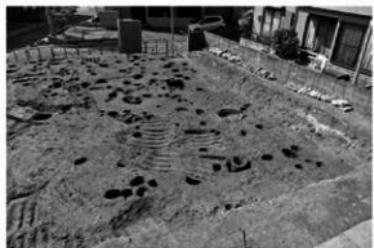


写真19 SB234 西半部(I区側 東から)



写真20 SD40 全景(東から)

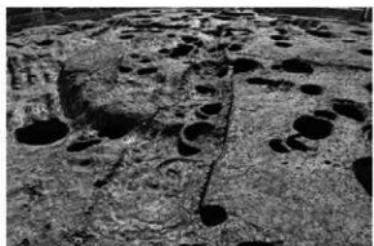


写真21 SD40 全景(北東から)



写真22 SD40 西側屈曲部(北東から)



写真23 SD50(東から)



写真24 SD50(北から)

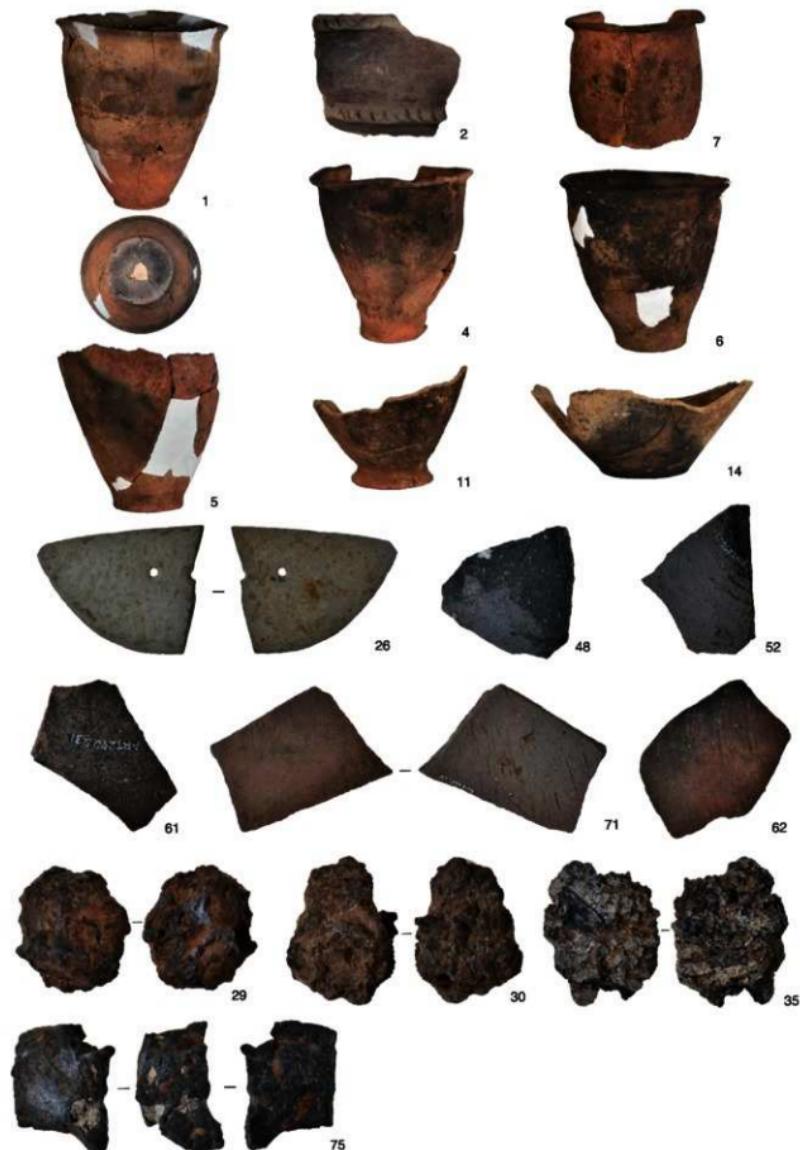


写真25 SK2 土層断面(東から)



写真26 SK2 遺物出土状況(北西から)

写真図版5



報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ60 一ありたいせきぐん だい270じちょうさほうこく一							
書名	有田・小田部 60							
副書名	—有田遺跡群 第270次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1407集							
編著者名	吉田大輔							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2021年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ありた・いせきぐん 有田遺跡群	ふくおか県福岡市早良区 小田部五丁目21	40137	0309	33° 58' 05"	130° 44' 64"	20190917 ～ 20191029	179m ²	宅地造成 ・住宅建設 (記録保存)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
有田遺跡群	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、土坑、柱穴、溝、小穴		弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品			
要約	<p>最も古い時期の遺構としては、弥生時代前期後半の2基の貯蔵穴を検出した。尾根の頂部に近い本調査区で検出されたことは、当時の土地利用の在り方を考える上で興味深い。弥生時代の遺構としては土坑、小穴等がある。遺構の多くは、7世紀から8世紀代のものと考えられるが、遺物は小片で少なく時期の比定は難しい。古墳時代後期から平安時代の始め頃までの遺構群とみられる。また、8～9世紀のものと考えられる。2棟の掘立柱建物が調査区の東側で確認できた。これは、本調査区の東側隣接地で実施された第166次調査区で確認された掘立柱建物群と主軸方位がほぼ同じであり、さらに東側で実施されている第67次調査でも同様の主軸方位の建物が検出されている。これらは、同時期の建物群としてまとまりをもつものとみられ、この時期の集落や建物群の展開を考えるうえで重要な成果である。また、本調査でも多くはないが、鉄滓が出土しており、この周辺で、鉄の加工・鍛冶が行われていた可能性があり、今後の周辺での調査成果も期待される。</p>							

有田・小田部 60
 —有田遺跡群 第270次調査報告—
 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1407集
 2021年3月25日
発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 有限会社 宏栄社印刷
 福岡市南区清水1丁目10-5

